

C
O
M E S S A G E
C
H



URS 指導者へのメッセージ

浦和ラグビースクール

はじめに

数あるスポーツの中でも、他のスポーツにない特有の文化的な側面をもつラグビー。特に子供の発育過程の中で、少年ラグビーは子供の成長に大きく寄与します。子供達の生き生きとした目や、突然変異のように大きく成長する子供達を目にした時、指導者冥利につきます。そんな至極の喜びを享受できるのも指導者だからではないでしょうか。

生まれて初めて、ラグビーに接する子供達に浦和ラグビースクールの指導者として私達が何を伝えていかなければならないのか、そんなURS指導者の皆さんへの指針となればと思い「URS指導者へのメッセージ」を作成しました。

CONTENTS

1. 「コーチの会費」その意味は
2. よく「観て」、よく「診て」、よく「見る」ことが大切
3. コーチが炊事？
4. 『戻る勇気』を持ちましょう！
5. URSのモットー 『礼儀』『勇気』『思いやり』
『礼儀』とは
『勇気』とは
『思いやり』とは

制作 浦和ラグビースクール運営委員会



「コーチの会費」

その意味は

URSでは、生徒から監督、校長に至るまで全員が平等に月会費を納めています。このことは、創立者の飯塚校長が子供達にラグビーを教える場を作りたいと、浦和ラグビースクールの命名に由来しています。

創立当時、他県のヨットスクールでの体罰事件などもあり、「スクール」という名に社会が過剰に反応していた時期でした。まして、どちらかという過激なスポーツのラグビー。「ラグビースクールでは刺激が強すぎるのでは」との周囲からの意見もあったそうです。

しかし、あえて「スクール」の名にこだわったのは、ラグビーを通して「学習」という強い思いから「浦和ラグビースクール」が誕生したという経緯があります。私たち指導者も子供達同様、月会費を納めているのは、指導者も「学習」という意味からです。

よく「観て」

よく「診て」

よく「見る」ことが大切

URSの指導においては、「欠点を矯正するより、長所を伸ばす」事に力点を置いています。「10人10色」とは良く言ったもので、子供達も足の早い子、遅い子、小さな子、大きな子、スバシッコイ子、緩慢な子など、子供達のパフォーマンスは、色々です。

指導者が行うべき事は、ラグビーの好きな子を創る。逆に言えば、ラグビーを嫌いにさせない事が大切です。人間誰しも、「注目されたい、愛されたい」という願望は持っています。ましてや発育途中の子供となれば、なお一層のことです。欠点を見つけるのは、容易な事ですが、長所を見つけ出すのは根気の要る難しいことです。必ずどんな子供でも長所はあります。その長所を伸ばすことができるのは、ラグビースクールであり、一番身近にいるコーチなのです。

では、どうすれば、良いところを見つけ出し、大いに伸ばすことができるのでしょうか？

『よく観察すること、よく分析すること、よくケアーすること』。小さな変化も見逃さず、「今のプレー、良かったね！！」とか、大いに褒めまくりましょう。

「褒めて、褒めて子供の自己成長エンジンを大いに刺激し点火させる」ことが肝要です。



コーチが炊事？

URSの一大イベントに南郷合宿（福島県南郷村）があります。子供も大人も世情の雑念雑音から解放されての2泊3日の合宿です。この合宿では、昼食の焼きおにぎりから流しそうめんの製作全てコーチが行います。

本稿を見て、驚かれる新人コーチの方もおられるかと思えます。実は、このことがURSの運営上、大きな意味のあることなのです。URSが他の多くのスポーツ少年団と異なるのは、父母会を設けていないことです。URSは、すべての子供にラグビーを享受させることを大原則にしています。もっと簡単に言うならば、ゲームにはすべての子供が出場して、楽しんでもらう。『勝利至上主義には、陥らない』。何故なら、発育段階の子供達の間で、ゲームで勝つことは微々たることなのです。



子供達が、本当に勝負しなければならないのは、まだまだ先なのです。我々指導者は、三峰山（埼玉最高峰）や筑波山、富士山の登り方を教えている訳ではありません。理想は高く、ラグビーだけでなく、子供達が社会に出て、自分の足でしっかりと地面を捉えエベレストを登るための土台作りをしているのですから。

勝利至上主義はスポーツエリートを育てる反面、その将来のスポーツエリートさえも、『燃え尽き症候群』に陥らせるたり、現段階では、チームの勝利に貢献できない子供達をスポーツ嫌いにさせてしまう危険性をもっています。親であるならば、わが子が一番可愛いのは、当然です。そんな親御さんの気持が、スクールへの圧力団体に変貌するかも知れません。そのようなスポーツ少年団は、実際に多く存在します。



将来も父母会を開設しないのは、URSの文化の一つと言えます。父母会が存在しない以上、我々指導者が、せっせと給水やら、炊事などをしなくてはなりません。コーチの作った不細工な愛情一杯のオニギリが、必ず将来、子供達の人間形成に役立つと信じて頑張りましょう！！

『戻る勇気』を 持ちましょう！

『戻る勇気』とは、何の事だろうとお思いの方も多いことでしょう。発育途中の子供達は、日々変化します。先週まで到達していたスキルが、突然出来なくなる。日の天候、気分（子供は気まぐれですからね）。成長期の子供は、縦と横に交互に伸びていきます。つまり、ある日突然、動作が緩慢になってくるなどは、当然のことなのです。この変化を、よく観て見逃さずに、しっかりと見てあげてください。

コーチをしていると壁にぶち当たることの連続です。ベテランコーチになるほど、迷いや焦りも多々出てきます。たくさんの事を教えてあげたいと思うほど、壁に当たった時の焦燥感は大きいと思います。この前まで出来ていたスキルが出来なくなったり、ステップアップしようと思ったら、うまくできなかつたり、交流戦で思った程のパフォーマンスを発揮できず、ボロボロになったり、コーチの思い入れが強いほど、壁の高さは高く感じると思います。

そんな時は、勇気を持って『戻り』ましょう。極端な例を言えば、Bの練習メニューからCのメニューに戻ってみるとか・・・。先は長いのですから多少の足踏み大いに結構じゃないですか！！今焦って、しっかりとした土台が無いまま、小手先で先に行くのがもっとまずいのではないのでしょうか。

ラグビーは、たくさんの運動要素の入ったスポーツです。逆な言い方をすれば、ラグビー以外の運動やら遊び（運動的な遊び）でも、十分にラグビーに繋がるのです。むしろ、発育段階の子供においては、多種多様な運動遊びの中で、多様な感覚を体験させた方が潜在能力を高め、将来大きな財産となることは、運動生理学的にも立証されているのです。発育段階、特にミニラグビーの段階では、ラグビーを教え過ぎではマイナス的側面に働くことさえあるとの証でもあるのです。ちっぽけな目先の勝利に一喜一憂することなく、大局を見据えて、自信と勇気を持って子供達の将来を見据えましょう。



『迷』コーチではなく、『名 (Go o d)』コーチになる為に・・・

礼儀 勇気 思いやり

上記の3つの言葉、URSの3信条・基本理念です。この3信条には、指導者にも指針となるべきメッセージが込められています。

『礼儀』

人は、誰でも一人では、生きることはできません。助け合わなければなりません。その為には、自分の存在を相手に伝えたり、相手の存在を知ったりする、回りの人達のおかげで自分が存在できている事への感謝、そんな人間の基本的な動作として『挨拶』というものがあります。昨今の近代科学の発達により、この基本的な挨拶すら希薄な世の中になってきています。

時代が変わるとも、『礼儀』という文化は、次世代を担う子供達へ継承していかなければなりません。では、指導の中で、この『礼儀』というの、どんな形で伝えていくのでしょうか？当たり前ですが、子供達へしっかりと挨拶することを伝えましょう。昨今では、家庭で教育すべきことの欠如が多い。せめてURSの子供は、しっかりと挨拶できる子にしましょう。指導者、子供達も服装は、きちんとしましょう。ソックスをあげる、ジャージはパンツの中に入れる。当たり前の事を当たり前出来るように、しっかりと毅然たる態度で臨みましょう。



さらに『試合』が成立する必要条件とは、何でしょうか？グラウンドやボールなどハード面が揃っていること、次に共にゲームに臨む仲間と相手が存在すること、3番目にレフェリーが存在することです。『試合』とは、お互いの技量を『試し合う』場なのです、決して相手を打ちのめす場ではありません。相手とレフェリーが居てくれるからこそ、試合が出来たことに感謝することを子供達にしっかりと伝えて下さい。

ミニラグビーのゲームにおいては、レフェリーとして、我々指導者が臨むことが多々あります。子供達に礼儀の重要性を説いて居る訳ですから、子供のラグビーといえども、レフェリーとしてのふさわしいスタイルと態度でゲームに臨んで下さい。

『勇気』

ラグビーの中で、『勇気』という言葉からイメージするのは、タックルを想像する方は大勢おられると思います。なぜなら、勇気をもって立ち向かわなければならないプレーだからです。さて、ラグビーの花形とも言えるこの『タックル』……。子供達の中には、自然とタックルに入れる子もいれば、恐怖心にさいなまれ、なかなかタックルに入れない子も多々います。そんなタックルに行けない子をどうするか？

もちろん練習において、安全なタックルの練習をするのは、当然ですが、最後は子供の気持と責任感によるものです。『指導者が自信と勇気を持って、待つ事です』。試合中に俗に言う『サイドコーチ』、タッチライン際から、どうしろ、こうしろと喚きたて、そんなサイドコーチが一番、呪文のように言い続けるのが「タックル、タックル」。URSの3信条を良く理解しているURSの指導者には、勇気の無い低俗なコーチは、いません。ゲームの中は、子供達の世界、大人がトヤカク言ってはいけません。むしろ、低俗なサイドコーチや父兄がいたら、その時こそ『勇気』をもって戒めましょう。

『思いやり』

ラグビーの中で、「思いやり」という言葉から、イメージされるのは、色々あると思いますが、特にミニラグビーにおいて、力点を置かなければならないのが、『パス』です。相手を思いやるパス＝味方のプレイヤーの動きを妨げないパス、そんなパスが出来る子を育てましょう。きっと相手を思いやることの出来る優しい大人に成長してくれるはずですよ。

さて、練習を援助してくれるお父さんコーチとURSコーチの違いとは、何でしょうか？月の会費の納付義務、炊事などラグビーとは無縁の雑役の義務？一番の違いは、URS全体の子供達、ひいては他のラグビースクールの子供達までもラグビー界の大切な共有財産と認識し、行動できるか否かだと思います。

親御さんよりお預かりしている大切な子供達ですから、今日のグラウンドコンディションはどうだろうか？子供達に目一杯楽しんでもらうための準備は、行えているだろうか？練習終了後、グラウンドに忘れ物は、ないだろうか？皆無事に帰路につけたらだろうか？子供達の為に、長年揃えてきた備品の整理は、出来ているだろうか？そんな、『思いやり』を実践するのが、URSのコーチだと思います。

ラグビーを形容する素晴らしい言葉に『ONE FOR ALL ALL FOR ONE』という言葉があります。こんな言葉も『思いやり』の一言で包括されるのではないのでしょうか。

生まれて初めてラグビーに接する子供達に、ラグビーの楽しさ、素晴らしさを伝えられる特権と責務を持つ我々URS指導者の指針となればと思い作成しました。ラグビーを通して、子供達が素晴らしい大人になって、その大人が次世代にラグビーの文化を継承してくれる。そんな至極の喜びを享受するのも指導者ならではと確信しています。

